



子どもたちの 読解力向上に向け、 組織的な対策を

国立情報学研究所 社会共有知研究センター長・教授

新井紀子 あらい・のりこ

一橋大学法学部入学後、渡米し、イリノイ大学大学院数学科博士課程修了。東京工業大学で博士(理学)を取得。2006年より国立情報学研究所情報社会関連研究系教授、2008年より現職。著書に『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』(東洋経済新報社)など多数。

国立情報学研究所プロフィール

日本で唯一の情報学の学術総合研究所として、2000年に発足。社会共有知研究センターでは、新井教授の主導の下、2011年より、AIの能力を検証するプロジェクト「ロボットは東大に入れるか」を推進している。

私は、「ロボットは東大に入れるか」を研究する中で、ロボットは最難関国立大学の入試には合格できないと判断するに至りました。現在及び近未来のAIには「意味」を理解することはできず、ビッグデータに基づく統計的な答えしか出せないため、個別具体的な問題や見たことがない問題などには歯が立たないからです。AIと人間の最も大きな違いは、対象にリアリティーを感じられるかどうかです。人はリアリティーを感じられるとAIに勝つことができるのです。

当センターが実施している「リーディングスキルテスト」(以下、「RST」)の結果からは、文章を読み取れない子どもの増加がうかがえます。特に、小学校段階における生活語彙の個人差は非常に深刻です。その背景には、家族でテレビドラマを見る機会が減った、家に新聞がない、壁に何もないオシャレな部屋が増えたなど、家庭での語彙環境が「砂漠化」し、幼児期から様々な語彙にリアリティーを感じる機会が減ってきてい

ることがあると考えられます。

そうした中、今後の学校教育は、子どもの語彙環境の「砂漠化」を前提に進める必要があるでしょう。それにはまず、診断による子どもの読解力の正確な把握が不可欠です。「RST」では、先生にも受けてもらい、子どものつまづきポイントをリアルに理解してもらうことを推奨しています。埼玉県戸田市教育委員会では、教員が率先して受検し、その結果を

踏まえて教員が作問するなど、組織的に子どもの読解力向上を図るPDCAサイクルの確立を目指しています。

学校がすぐできる対策では、例えば、トイレなど目につく所に張り紙をしてお、「見える語彙」を増やす方法があります。また、保護者への啓蒙も必要です。ニュースやドラマを子どもと一緒に見るなど、家庭での語彙環境を充実させるよう、学校から働きかけていただければと思います。

近未来への布石 リーディングスキルテスト(RST)

◎「RST」の出題例(2016年度)と正答率

Alexは男性にも女性にも使われる名前、女性の名Alexandraの愛称であるが、男性の名Alexanderの愛称でもある。

Alexandraの愛称は()である。

正解	学年別の正答率			
	全国中学生	中1	中2	中3
A Alex	37.9%	23.5%	30.6%	51.4%
B Alexander	64.6%	64.9%	68.0%	57.1%
C 男性				
D 女性				

小学6年生～社会人対象の読解力テスト。同研究所は「ロボットは東大に入れるか」の研究を通して、約8割の高校生がAIに負けたのは、教科書程度の説明文の意味を理解できていないからではないかと考え、2016年度から「RST」の試行を開始した。1年半ほどの間に約2.5万人が受検。左の問題では、中学生の正答率は約38%にとどまったが、その背景には、「愛称」という言葉の意味を知らない生徒の増加があると考えられている。

*国立情報学研究所提供資料を一部抜粋して掲載。